

ナスカ地上絵研究にAI

山形大坂井教授、活用語る

鹿嶋・清真学園高中

世界遺産「ナスカの地上絵」の研究で知られる山形大教授、坂井正人さんの講演会が15日、鹿嶋市宮中の清真学園高中（柴山修二校長）で開かれた。人工知能（AI）やドローンを活用した調査で新たな地上絵を発見した経験を披露し、古代文明の研究進展に先端技術が果たした役割を解説した。同高のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）活動の一環。中学3年から高校2年までの約500人が参加した。

坂井さんは、自身が調査に、地上絵が30〜40個ほどを始めた1990年代前半しか見つかっていなかった



最新技術を駆使してナスカの地上絵の謎に挑んだ経験を語る山形大教授の坂井正人さん＝鹿嶋市宮中

ことを説明。広大なエリアを探るため人工衛星から撮影した画像を入手し、学生と協力しながら新たな地上絵を見つけ出したことを振り返った。

AIの活用について、学習データを増やすための工夫を、具体的な手法を示しながら紹介。最新技術による調査が進んだ結果、現在では約900個の地上絵が把握されているという。

研究を始めた動機として、ナスカを含む古代ペルーの人々が、文字を持たず絵でコミュニケーションを取っていたことへの関心を挙げた。「現代社会における文字とは何なのか。文字ではない方法と比較しながら

ら研究することに魅力を感じた」と話した。地上絵は巡礼路に沿って作られているとし「絵の配列に社会的な情報が組み込まれているのではないか」との仮説を披露した。

大学の史学部（科）を志

望しているという同高2年の加茂翔真さん（17）は「文字を使わない文明をどう研究するのかイメージが湧かなかったが、絵の配列にも意味があるという視点が興味深かった」と感想を話した。（村田知宏）